

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

イタリアの子どもに日本語を教える ②

深草 真由子

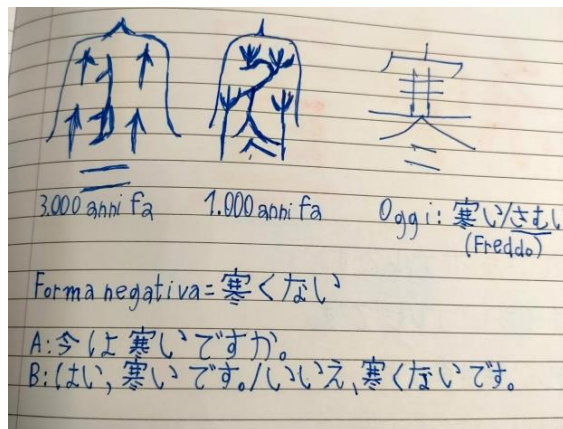
2023年8月号では「イタリアの子どもに日本語を教える」というタイトルで、私の日本語教師ぶりをお話しさせていただいた。南イタリアの小さな町にある語学学校で小中学生に日本語を教えはじめて2年が過ぎた頃だった。それからまた1年と数か月がたち、〈子どもクラス〉は4年目に入っている。

前回そのクラスのようなすをお伝えしたときはCちゃん、Eちゃん、Aちゃんの三人組だった。「だ～もさんがこ～ろんだ！」でずいぶん盛りあがったものだ。その翌年からは、英語のレッスンと時間が重なったためにCちゃんが抜けたので、EちゃんとAちゃんの二人になった。

Eちゃんは15才で、今年度から liceo scientifico(理数系の高校)にあがった。物理という「この世でいちばん訳のわからないもの」の存在を知り、中学であんなに嫌いだったフランス語が今は懐かしくて仕方がないらしい。一方のAちゃんは10才半で、小学校の5年生(最終学年)になった。最近背がぐっと伸び、顔だちも bambina というより ragazza のそれになりつつある。いつまで〈子どもクラス〉と呼んでよいものか悩ましいところだが、とにかく二人は今も日本語を学びつつけてくれている。机と椅子をぴったり横に並べ、肩が触れあうくらいの距離に座って、あいかわらずワイワイやりながら。

このクラスをもつことになった当初は、適当なテキストブックを見つけることができなくて、ずいぶん困ったものだ。というのもイタリアで刊行されて

いる教科書は、日本語を専攻する大学生向けのものが主だからだ。日本で出ているものについても、学習者として想定されているのは、やはり大学生以上であることが多い。子ども向けに作られたものもあるにはあるが、日本の学校に通う外国籍の子や海外に住む日本人の子を対象にしたもので、日常生活で日本語を使うチャンスがほとんどなく、ゼロから学びはじめる私の生徒にはあまり向いていないように思われた。だから〈子どもクラス〉は教科書なしでスタートしたのだった。



【Eちゃんのノートより】

ところがたまたまあるサイトで、一般的な日本語教授法が自分の生徒の学習目的に合っていないと感じていた先生がみずから作ったテキストがあることを知った。『PRACTICAL JAPANESE—くらしと旅行のための基礎日本語』(IBC パブリッシング)である。著者の小川清美さんは仕事や

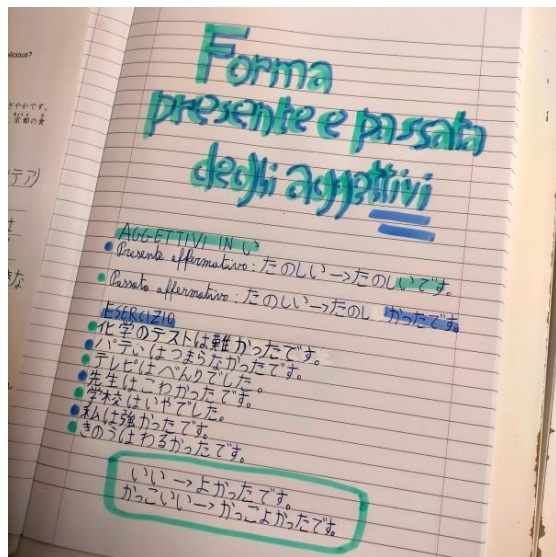
旅行で日本に短期滞在する人たちを主な相手に日本語を教えている。「せっかく苦労して平仮名を覚えたのに、レストランのメニューが読めない」「店員さんの言うことが分からない。先生の話す日本語とちがう」。こうした生徒さんの声によく耳を傾けて、オリジナルの教材を作ったということだ。さっそく私はこの本を取り寄せた。

手に取ってみてすぐに気に入った。B5 サイズで薄くて軽い。子どものリュックの中身は重くない方がいいのだ。文字が大きく、フォントが統一されていて、イラストもかわいい。そしてなによりの特徴は、仮名と漢字のすべてにローマ字で読み方が振ってあることだ。文字の習得は後回しにしても、とにかく話せるようになりたい人のためにはちょうど良い。〈子どもクラス〉でも平仮名・片仮名を全部マスターしたあとで初めて本格的に文法・会話の練習をスタートさせるようなやり方は負担が大きいと思ったので「無理して覚えなくても、調べて分かるならそれでいい」というスタンスでやってきた(それでも E ちゃんは仮名を全部覚えて、書けるようになった)。だからローマ字に頼りながらも、新しい表現や文法規則を学べるようになってきているこの教科書は実にありがたい。加えて、言葉による文法の解説が最低限におさえられていることも〈子どもクラス〉用としてはポイントが高い。日本語の仕組みは、矢印や囲み枠などによって、学習者の視覚にうったえる形で説かれている。

この教科書を〈子どもクラス〉で使うようになったことで、学習の道筋のようなものが見えてきたように思う。今は形容詞を勉強している。形容詞には、名詞の前に付いてそれを修飾する働きと、文の最後に付いて述語になる働きがある。述語になる場合は肯定か否定か、非過去か過去かで、イ形容詞とナ形容詞のそれぞれで形を異にするので、少しややこしい。

クラスではこちらが提示した主語にあわせて子どもたちが形容詞を選び、それを正しい形に変えて述語を作る練習をする。できるようになると、身近な話題で自由に形容詞文を作ってもらおう。すると A ちゃんが「イタリア語の先生はこわいです」と言って立ちあがり、学校の先生たちのモノマネを始める。それが一通り終わるのを待ち、今度は E

ちゃんに「数学のテストはどうでしたか」と話をふってみる。すると「とても難しかったです」と、副詞付きの返事をうまいこと返してくれたかと思ったら、理数系の科目がどうしても嫌なので、遠くの町にある文系の高校に転入したいと思っているんだと告白してくれる。いつもこんなかんじで、授業はすこしづつ脇道へそれていく…。



【E ちゃんが見つけた形容詞文】

漢字については、白川静著『常用字解』(平凡社)ののっつて、成り立ちをしっかりと教えることにしている。「祭」なら、まず祭壇の上で肉をお供えするところを想像させ、それを絵に描かせたあとで、三千年前の中国人が書いた甲骨文字の「祭」を見せる。そして二千年前の篆文はどんな形か、今の日本で使用されている漢字はどんなものか、字の発展のようすを順に示す。その際、形または意味のつながりで、いくつかの漢字を一つのグループにまとめ、それらをいっしょに教える。私なりの方法なので至らない点もあるだろうが、A ちゃんと E ちゃんには合っていたようで、こうしてもう 100 以上の漢字と一緒に勉強した。漢字の成り立ちを通して古代東洋の文化に触れることになり、それが記憶の助けにもなるのだろう。それになにより、彼女たちは絵を描くのがとても好きなのだ。A ちゃんはこのためにペンを 36 色もそろえて持ってきているし、E ちゃんは漫画家の卵かと思うくらいに本格的なイラストを描きあげる。

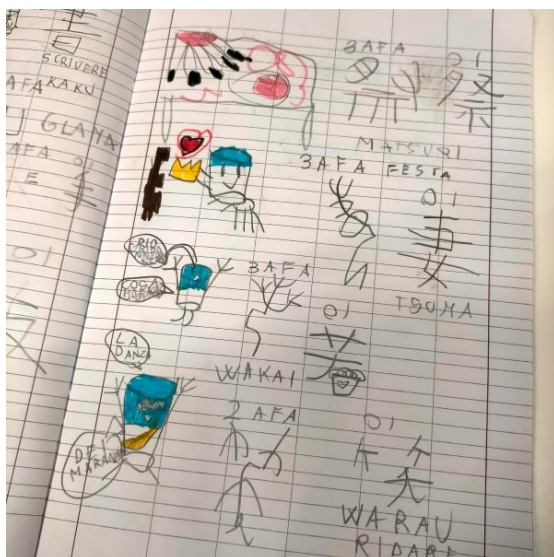
二人は音楽も大好きだ。ある日「すごい！ すごい

い！」と興奮した声をあげて、スマホの画面を見せてくれたことがあった。YOASOBI の世界的大ヒット曲『アイドル』だった。それが主題歌として使われているアニメがどうやらイタリアでも配信されたいらしい。YouTube で見ることのできるミュージックビデオに、AちゃんもEちゃんも釘付けになっていた。たしかにとても斬新である。

もともとAちゃんとEちゃんは二人とも、ボーカロイドの音楽に夢中だった。よく初音ミクのことを話題にしているし、スマホを使って好きな曲にいくらでもアクセスできるから、こちらがびっくりするくらいに詳しい。特にEちゃんはお気に入りのバーチャルシンガーのコスプレをしてコンテストに出場するくらい、ボカロにハマっている。だからボカロPでもあるAyase氏がつくるYOASOBIの楽曲も、二人の好みに合うにちがいない。そう思って、おすすめ曲をいくつか挙げておいた。

するとその数週間後のレッスンの最中に、Eちゃんが「これが好き」と言いながら、(私があえて「おすすめ」には入れていなかった)『夜に駆ける』のサビをそらで歌いはじめた。こちらもリズムにあわせて首を動かし、続けるように促すと、なんとそのまま最後まで歌いきってしまった。感心して尋ねると、内容は分からないがメロディが気に入ったので、歌詞を暗記して、親戚が集まる従妹の誕生日パーティーで歌った、ということだ。実は『夜に駆ける』は、メロディは軽快でありながら、自殺をテーマにした曲である。だからお祝いの席にふさわしいとはとても言えないのだが、決して易しくはない日本語の歌を丸々覚えたEちゃんの吸収力には、たいへん驚かされた。好きこそ物の上手なれ、である。

そんなEちゃんは将来、語学力をいかした仕事がしたいそうさ。きっとできると私は思っている。Aちゃんは「ハローキティ新幹線の運転士になりたい」と以前は言っていたが、今はどうだろうか。こうしてほんの少しではあるが、成長する二人のそばにいられることは私にとって大きな喜びである。彼女たちの果てない好奇心に応えられるよう、今年度も楽しく学びの多いレッスンをしたいと思っている。



【Aちゃんの漢字のノート】

(元当館スタッフ)

～会館だより～

<2025年冬の無料体験レッスン>

1月からの冬学期に先だって、無料体験レッスンを開催いたします。この機会にぜひ新たな世界への扉を開けてみましょう！

●イタリア語無料体験(初心者向け)

京都本校: 1月8日(水)11:00
1月11日(土)11:00

大阪梅田校: 1月9日(木)19:00

●イタリア語無料カウンセリング(経験者向け)

京都本校: 1月11日(土)14:00～

●スペイン語無料体験(初心者向け)

京都本校: 1月11日(土)10:30

* トンマーゾ・ピンチョ

『ぼくがエイリアンだったころ』*

杉 栄子

さる10月12日、大阪市の中央図書館で、イタリアの作家トンマーゾ・ピンチョ氏の代表作『ぼくがエイリアンだったころ』の邦訳出版記念トークイベントが開催された。

著者本人と翻訳された二宮大輔氏が一緒に登壇するという、面白そうな内容に惹かれて申し込んだが、忙しさにかまけて作品を読まないどころか手に入れることもないままイベント当日になってしまった。会場で購入し、開演を待つ間に最初の数ページを読んでみた。

「何か思っていたのと違う」というのが率直な第一印象だ。何の予備知識も持たなかった私は、『ぼくがエイリアンだったころ』という、仮名のみの平易なタイトルと「エイリアン」という単語から、子供時代の空想を思い出していた。自分以外はみな宇宙人なんじゃないか、宇宙人がうまく人間に化けて生活しているんじゃないかと、子供の頃に一度は空想したことがないだろうか。私はある。と言っても、その宇宙人たちが自分に害を加えたりするわけではなく、単に本物の人間ではないのではと、うっすら気味悪く感じつつも一晩眠れば忘れてしまう程度のものだ。そんなわけで、他愛のないファンタジーを勝手に想像していたので、数ページ読んで、小説の雰囲気自分の想像と全く違うことに驚かされたのである。

舞台は1990年代のアメリカ西海岸の小さな町アバディーン。西海岸といえばカリフォルニア、そこには明るく健康的な太陽と海があって、、、というようなステレオタイプなイメージとは真逆の、いつも雨が降って薄暗くジメジメした感じの街である。その陰気で鬱々とした雰囲気の中で、主人公のホームが暮らしている。幼い頃に周囲の大人たちへの信頼感を失い、彼らは夜眠っている間に宇宙人に少しずつ体を乗っ取られておかしくなったのだと考える。そして自分も乗っ取られないように

するために彼は眠ることをやめる。おかしくなった大人たちの社会に適応できず、18年もの長い間、不眠状態に苦しんでいる。そしてある夜、街をさまよっていた時に、カートという青年と出会う。彼もまた生きづらさを抱え、周囲ではなく自分自身が別の星から来た宇宙人だと思っていた。カートからドラッグを渡された主人公は次第にそれに溺れていく。



【『ぼくがエイリアンだったころ』】

画像提供:ことばのたび社

開演時間になった。イベントには、著者と訳者のお二人に加え、ピンチョ氏と親交の深いイタリア人作家ラウラ・今井・メッシーナ氏も登壇していた。メッシーナ氏は東京在住で、日本に関するテーマをもとにイタリア語で小説を書き、イタリアでも絶大な人気がある。代表作は『天国への電話』。題材になったのは、岩手県大槌町に実在する「風の電話」である。電話線が繋がっていないこの電話ボックスには、亡くなった大切な人と話したいと訪れる人が後を絶たないという。

メッシーナ氏から、ピンチョ氏は「境界を越える」作家であると紹介があった。画家を志してローマ

の画廊で働いていた時に執筆活動を始めた。漫画家として活動をした時期もあったとのこと。「絵を描く」ことから「物語を書く」ことへ、分野の境界を越えたというのがひとつ。また 90 年代をニューヨークで過ごし、その後ローマに戻ってきたということで、国の境界も越えた。現在は作品の執筆をしつつ、英語の小説をイタリア語へ翻訳する活動もしており、2021 年にはパヴェーゼ翻訳賞を受賞している。

トーマズ・ピンチョという名前はペンネームである。アメリカの作家トマス・ピンチョン(Thomas Pynchon)をイタリア風に読み変えたものであるが、このアイデアは、エドガー・アラン・ポーをもじった江戸川乱歩からヒントを得たそうだ。さらにこの日本の小説家には江戸川という地理的な名称が入っているので、自分も同じようにしようと思い、ローマにあるピンチョの丘をイメージしたとのこと。今回が初来日らしいが、重要なペンネームを選ぶにあたり日本と関連があったとは、親近感が湧くエピソードだ。

ピンチョ氏が小説冒頭部分をイタリア語で朗読した後、三者の間で質問と回答が飛び交った。その中で印象に残ったやりとりを2つ紹介したい。

メッシーナ氏:

「執筆、翻訳、絵画という異なる分野に情熱を持たれていますが、その中で執筆はどのような位置付けですか？」

ピンチョ氏:

「知るためのツール、世界を理解するための道具です。科学者が観察するように、作家も世界を観察します。いずれも「世界を読み取る」という作業の間に隔たりはありません。同じ活動の3つの側面であるとも言えます。

翻訳に関して言えば、例えばイタリア語から日本語へと、別の言語へ換えることだけが翻訳ではありません。皆さんは日本語で読書をすると思いますが、読んだ日本語を自分の内なる日本語に変換しているはずで

私は執筆を学ぶために翻訳を始めました。上手に書けるようになるには何をすれば良いか。例えば、絵画を学ぶために美術学校では模写から始めます。だから執筆においても、ま

ずは模写をするように、翻訳をしました。

翻訳はたくさんの方を教えてください。訳すという作業は、登場人物と同化すること、その人の声を具現化することです。言い換えれば俳優のようなものです。その証拠にイタリア語では「tradurre(訳す)」を「interpretare(演じる、通訳する)」とも言います。良い翻訳は良い演技なのです。

翻訳でも演技でも「自然であること」が求められますが、翻訳には間違いが付きもので、完璧な翻訳というのはあり得ません。

ヘブライ語の世界で神の言葉を翻訳する時の3つのルールというのがあります。1.何も付け加えてはならない。2.何も取り去ってはならない。3.何も解釈してはならない。でも実際の翻訳はこうはいきません。執筆においても 100% 完璧に表現することは出来ません。」

メッシーナ氏:

「翻訳するにあたり、この作者、この作品を選んだのはなぜですか？」

二宮氏:

「ローマの大学で文学を学んでいた時、日本語を学ぶイタリア人と言語交換をしていました。ある日彼が持ってきた新聞にピンチョ氏の短編が掲載されていたのがきっかけでこの作家を知りました。この作品を選んだのはニルヴァーナが好きで、今年はカート・コバーンが亡くなって 30 年という節目にあたるからです。

翻訳の日本語について一つお伝えしたいことがあります。小説は「それで恋人は？」という質問で始まりますが、原文では「E l'amore?」となっています。この amore という単語にはたくさん意味があります。概念としての愛、恋人という具体的な人、またはセックスという行為など、文脈によって意味が変わります。どの日本語にすべきか悩んだ末に「恋人」という訳にしました。」

私は実務翻訳しかやったことがないが、それでも翻訳作業をするにあたり、どの言葉を選ぶかいつも悩まされる。イタリア語でも日本語でも、一つの言葉にはたくさん意味がある。ある一つの単語

を日本語に訳しそうとしても、その全ての意味をカバーする日本語の言葉は存在しない。だから数ある意味の中から最適と思えるものを選ばざるをえないのだが、それは同時に、選ばれなかった方の意味は無かったものにしてしまう。それで問題ない場合もあるが、今回の冒頭の「E l'amore?」は、そのままたくさんの意味を含めた質問だから、訳者の二宮氏は相当悩まれたことと思う。

余談だが、イタリア人はよくこの質問をする。仲の良い友人同士でも、そこまでの知り合いでなくても、話題の一つとして出てくるのだが、大抵は「恋愛事情はどう?」という意味だ。ガイドで案内するお客様からもよく聞かれる。初対面でそんなプライベートなこと聞くの?と最初は驚いたがもう慣れてしまった。恋愛事情を答えてもいいし、答えなくてもいいし、先ほど書いたようにたくさんの意味を持つ言葉だから、愛とは何だと概念の話題に変えても全く問題ない。

トークイベントに戻ろう。最後に質疑応答があり、すでに作品を読んだ方から、作中では「システム」という言葉が何度も使われているが、これはドラッグを意味するのかと質問があった。(ちなみにイタリア語では sistema といい、系統、体制、制度、仕組み等々、これまたたくさんの意味を持つ言葉である。)

ピンチョ氏「はい、ドラッグ、ヘロインのことです。薬物依存者は、使用しているドラッグを、正式名称ではなく隠語を使って呼ぶという特徴があります。主人公にとっては、不眠を解決してくれる救いの薬でもあります。同時に彼を閉じ込める檻でもあります。世界を機能させるためのシステムという意味など、いろいろな意味を込めてシステムと呼ぶことにしました。」

前日に到着したばかりというピンチョ氏は、最初はお疲れの様子でゆっくりと話されていたが、徐々にエンジンが温まってきたのか、途中からかなり饒舌にいろいろなことを話してくれた。これからさらに盛り上がりそうな雰囲気の中、予定時間を超えてイベントは終了した。

その後、数日をかけて小説を読んだ。正直なところ、最初はなかなか読み進められなかった。社会への不適應感や疎外感から薬物依存になった

人の物語に容易に入り込めなかったからでもあるし、翻訳された日本語が気になって元のイタリア語では何と言っているのかなど、ストーリーとは関係ないことを考えてしまったからでもある。でも途中からは引き込まれるように一気に読んだ。

ドラッグについての客観的な説明もあった。その成分や歴史、どうやってドラッグがアメリカに到達したのか、摂取すると身体にどのような反応を引き起こすのか、どのように依存していくのか、禁断症状がどのようなもので、その時に適切な治療がなければどうなるのか等々。

ドラッグの効果で眠れるようになっても、主人公の生きづらさは変わらないし、それどころかドラッグに支配され、さらに苦しくなっていく。語られるエピソードは現実なのか、それとも薬物依存者の妄想なのか、時折わからなくなる。あるところまで読めば、この話がハッピーエンドで終わるわけがないと気づく。それでも、苦しいけれども先を読もうとさせる力がある小説だった。

イベントや小説で印象に残ったことは他にもあるが、紙面が足りなくなってしまった。サイン会でピンチョ氏に「大阪まで来てくださってありがとう」とお伝えしたら、とても個性的なサインと共に「歓迎してくれてありがとう」と返してくださいました。その後どれくらい日本に滞在されたのだろうか。どこかで日本の印象について発信してくれたりしないかと密かに期待している。

翻訳に関する二宮氏の話ももっとお聞きしたかった。コレンテ執筆陣にいらっしゃるので、いつか書いて下さるだろう。今回は、おこがましくも私が記事に取り上げられることを快諾してくださいました。ありがとうございます。

(当館語学講師)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>